

日本語における空間の対格標示について

菅 井 三 実

0. はじめに

本稿の目的は、現代日本語における空間の対格標示を包括的に考察し、[経路]や[起点]に関する種々の言語現象に対して意味的な観点から自然な説明を与えることにある。第1節で、対格に固有の原理的な意味を《過程のプロファイル》と特徴づけ、第2節で空間の対格が[起点]と[経路]を相補的に実現することを示す。第3節では[起点]の対格標示を《起点の焦点化》と分析し、[着点]>[起点]という非対称性との整合性から、[起点]の対格標示に対する制約を意味的に説明する。第4節では、対格の《過程》的性質から[起点]の対格標示と奪格標示についても一貫した方法で説明できることが例証される。

1. 対格の基本的特質

第1節では、まず「ヲ格」の基本的な特性を明らかにし、非空間的な意味と空間的な意味が同一のスキーマから具現化されることを例示する。

一般に、対格の用法を列挙するとき、条件を厳しくすれば多くの区分も可能であろうが、大雑把に言えば次の5つに整理できる。^[1]

- | | | |
|--------|---------------------------------|------|
| (1)(a) | 太郎がリビングで夕方まで テレビ を見ていた。 | [対象] |
| (b) | 太郎が健康のために 公園 を自転車で走っている。 | [経路] |
| (c) | 太郎が急用で 部屋 を出て行った。 | [起点] |
| (d) | 太郎が学生時代にカナダで 3週間 を過ごした。 | [時間] |
| (e) | 雨の中 を太郎が病院まで見舞いに来てくれた。 | [状況] |

このような多義的性格をはらむ対格について方法論的に考慮すべきは、影山(1980:40-41)や三宅(1996:147)の言うように対格を意味的に空虚と想定すべきかどうかという点であるが、対格を意味的に空虚と考えてしまうことには本質的に大きな問題が伴う。すなわち、本稿で扱うような[経路]や[起点]に関する言語現象に対して意味的な説明を放棄しなければならないというものである。意味を放棄した文法研究は意味がないのだから、本稿は Wierzbicka(1981:58)が明確に述べているように、文法的性格が高いとされる「対格(accusative case)」にも固有の意味があ

ることを前提に、まず「ヲ格」を意味的に特徴づけることから始めたい。^[2]

では、対格の本質的な意味は一体どのように特徴づけられるだろうか。形式の意味が体系の中で相対的に規定されるという常識的な観点から言えば、次の例が示すように「ヲ格」は「ガ格」の対極にあって、かつ「カラ格」と「ニ格」の間に位置づけられることが分かる。

- (2)(a) 社長が**支店**を京都から大阪に移した。
 (b) 太郎が**花子**を係長から課長に抜擢した。

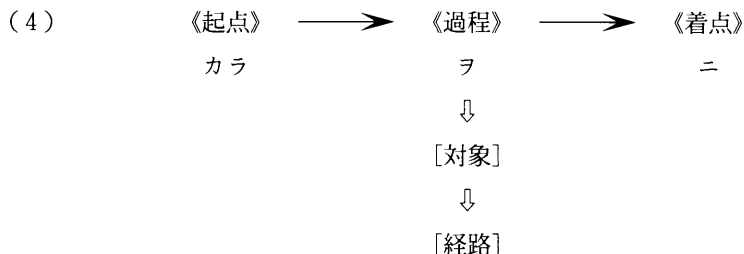
(a)で「移す」という事象において働きかけを受ける側の対格「支店」は働きかけを与える側の主格「社長」と対峙する関係にあり、しかも、空間的に奪格の「京都」と与格の「大阪」の中間に位置づけられることになる。同様に、(b)のような抽象的な変化においても対格の「花子」は奪格の「係長」と与格の「課長」の間をたどることになる。

同様に、[経路]の対格も「カラ格」と「ニ格」の間に位置づけられる。

- (3)(a) 太郎が東京から**国道1号線**を大阪に向かった。
 (b) 宇宙の彼方から彗星が**軌道上**を地球に接近しています。

(a)において対格の「国道1号線」は奪格の「東京」と与格の「大阪」を結ぶ中間的な空間を実現しており、(b)でも対格の「軌道上」は奪格の「宇宙の彼方」と与格の「地球」を結ぶ空間的な中間領域と特徴づけられる。^[3]

このような対格の多義的意味を包括的にネットワーク化するため、菅井(1998:25)では、池上(1993:45)や山梨(1994:103)を参考に、次のような「イメージスキーマ(image schema)」を導入し、[対象]と[経路]を、中央の《過程》の実現体と分析した。



(4)の図式は、Johnson(1987:113-117)による《SOURCE-PATH-GOAL SCHEMA》を基本に据えつつも、中間部分の《経路(path)》を《過程(process)》に変更したものであり、格との対応は《起点》《過程》《着点》が各々「カラ格」「ヲ格」「ニ格」で実現される。^[4]

もちろん、《起点》と《着点》の間を《経路》から《過程(process)》に変更したことには理由がある。すなわち、仮に《起点》と《着点》の間を《経路》と規定すると、対格の意味役割として1次的に空間的な[経路]が引き出され、そこからモノ的な[対象]が2次的に引き出されることになり、結果的に Hopper and Thompson(1984:746), Claudi and Heine(1986:302) 及び Heine, *et al*(1991:157) のいう「モノから空間へ」という隠喩的写像の「単方向性(unidirectionality)」に反するからである。上図のように、《起点》と《着点》の間を《過程》と規定することにより、一般的な「モノから空間へ」という隠喩的写像の単方向性に符合する形で、[対象]から[経路]の順に拡張させることができるのである。併せて、[対象]と[経路]をスキーマ上の《過程》から導き出すことにより、なぜ[経路]が「ヲ格」で標示されるかという素朴な問いにも自然な論理で答えることができる。移動においては[経路]こそが空間的な《過程》にはかならないからである。

ところで、本稿で言うスキーマ上の《過程》とは、平明に言えば“はじまりと終わりの間”であり、対格は《過程》にあるモノや空間をプロファイルするというのが本稿の分析である。同時に注目すべきは、対格は単に「カラ格」と「ニ格」の中間に位置づけられるというだけでなく、動詞によって表される事象において「カラ格」と「ニ格」が時間的にも各々《はじまり》の部分と《終わり》の部分のプロファイルするのに対し、対格は《はじまりと終わりまでの間》としての時間的な《過程》をプロファイルする点である。実際、[経路]の対格が事象における時間的な《過程》をプロファイルすることは、次のようなペアから具体的に確認される。

- (5)(a) 標高2000m級の山を登ってトレーニングする。
- (b) 標高2000m級の山に登ってトレーニングする。

このペアで、後段にある「トレーニング」の内容を読み取れば、(a)では「登る」という行為それ自体が「トレーニング」の内容と解釈され、例えば、さらに標高の高い山への挑戦を目標に事前の練習をしているような含意がある。言い換えれば、空間的な行程における通過点としての[経路]を対格で実現させることによって、前段は時間的にも「登る」という事象の過程的側面をプロファイルしていると言える。他方、(b)では「山」に登った後に別の種類のトレーニング——例えば、陸上選手などの高地訓練——が「トレーニング」の内容として期待される。つまり、空間的な着点ないし目的地である[着点]を与格で実現させることによって「登る」という行為の結果的側面に焦点が当てられることが分かる。^[5]

最後に、対格の意味役割として、(1)とは別に[場所]のようなものを加える必要があるかどうか確認したい。例えば、対格の意味役割として[場所]の必要性を暗示する例に「空を舞う」のような表現があるが、結論から言えば、対格の意味役割として新たに[場所]を設定する必要はない、というのが本稿の立場である。というのも、1つの系として“主体の所在位置として対格が空間領域を切り取るのは、移動表現に限られる”という命題が妥当性をもつと考えられるからである。

この系は、決して“移動表現における空間領域は必ず対格で標示される”と言うものではない。実際、移動表現において空間が「デ格」や「ニ格」で標示され得ることは周知のとおりである。むしろ重要なのは“移動を伴わない事象で対格が空間領域を切り取ることはない”という点である。その論拠として、次のペアが示すように、移動を伴わない事象を描写するとき、空間領域の格標示は「ヲ格」ではなく「デ格」が求められる。

(6)(a) ヘリコプターが上空で静止している。

(b)?? ヘリコプターが上空を静止している。

このように、主格の「ヘリコプター」が位置的な変化を被らないとき、空間領域の「上空」は、(a)のように「デ格」で標示されるべきであり、(b)のように「ヲ格」で標示すると容認度が低くなる。したがって、前述の「空を舞う」も「空」が対格で標示されていることから、一種の移動表現と見るのが適当と思われる。もし移動を伴うことなく空中での演舞のみを表すのであれば「空で舞う」のように「デ格」標示が期待されるからである。かくて、移動(位置変化)を伴わない[場所]を対格の意味役割として設定する必要はないというのが結論である。^[6]

以上、本節では「ヲ格」が《起点→過程→着点》における《過程》をプロフィールすると規定し、[経路]にも《過程》性が保持されることを確認した。

2. 対格による[起点]標示の構造的要件

この第2節では[起点]をマークする対格について意味的な観点から考察を加え、[経路]との相補性と有標性を確認する。

まず、考察対象となる言語現象として、次のペアが示すように、動詞が<離脱>ないし<出発>の概念を含むとき、[起点]の格標示は奪格と対格で交替が許される。

(7)(a) 花子が現場から離れた。

(b) 花子が現場を離れた。

つまり、[起点]の「現場」は、(a)のような「カラ格」だけでなく、(b)のように「ヲ格」でも標示できるというものである。

この現象を意味論的に解析するための理論的前提として、[起点]における格交替に関する構造的要件を整理しておこう。まず、動詞が移動を表すときの格標示パターンは次の(8)(a)の通りであり、対格は[経路]をコード化する。このとき、[起点]は奪格がコード化し、[着点]は与格がコード化する。

- (8)(a) 移動動詞の場合: [起点] → [経路] → [着点]
 カラ ヲ ニ
- (b) 離脱動詞の場合: [起点] → → [着点]
 カラ (ヲ) ニ

他方、動詞が〈離脱〉や〈出発〉を表すときは、(b)のように[起点]と[着点]だけがコード化され、対格は実現されない。(b)で重要なのは絶対に[経路]が実現され得ない点であり、この(b)の状態こそが、次の(8)(b')のように[起点]を対格で標示する前提条件になる。

- (8)(b') 起点の対格標示: [起点] → → [着点]
 ヲ ニ

この(8)(b')が[起点]を対格で標示したときの状態であるが、ちょうど「ヲ格」が[経路]から左側の[起点]に流用されたような形になっていることが分かるであろう。実際、対格のもつ意味役割としての[経路]と[起点]は相補的に分布するのであって、対格は第一義的に実現すべき[経路]がゼロ実現の場合に限り[起点]の標示に流用され得るとというのが本稿の分析である。その論拠は、次の例が示すように、動詞が対格で[経路]を実現し得るとき対格が決して[起点]を標示し得ないことに求められる。

- (9)(a) 大阪から**国道**を帰った。 [経路]
 (b) * **大阪**を帰った。 [起点]

つまり、動詞「帰る」は(9)(a)のように[経路]を対格で標示し得る動詞であるから、対格は常に[経路]として解釈され、したがって、(a)と同じように「大阪」が[起点]として解釈される限り、(9)(b)のように「大阪」を対格で標示することはできない。これにより、[経路]が実現可能な動詞句で対格が[起点]と解釈されることはなく、[経路]と[起点]が相補的に実現するという本稿の分析が支持されると思われる。

また、対格による[経路]と[起点]が相補的に分布するとの分析は、[経路]と[起点]の両方を同時に対格で標示できないという事実からも明示的に確認される。例えば、次の(10)のペアにおいて、(a)のように下線を施した[起点]の「西宮IC」を「カラ格」で標示すれば[起点]と[経路]が単文中に共起できるが、(b)のように「ヲ格」で標示すると非文になる。

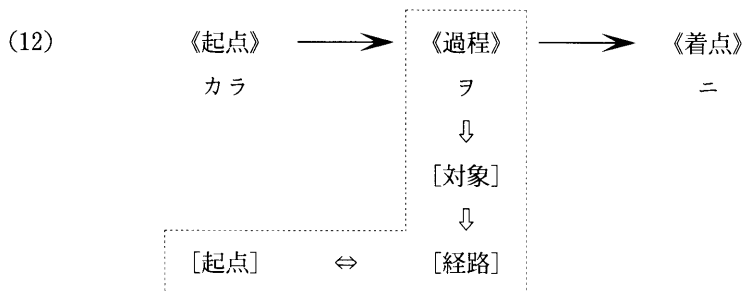
- (10)(a) 西宮ICから急いで**高速道路**を来た。 [起点]と[経路]
 (b) * 西宮ICを急いで**高速道路**を来た。 [起点]と[経路]

つまり、[起点]と[経路]の両方を同時に対格で実現させることは不可能であり、このことは、次のように[起点]と[経路]以外の組み合わせが単文中で共起し得ることと対照的である。

- (11)(a) 非常階段を必死で犯人を追いかけた。 [経路]と[対象]
 (b) 批判の中を一人で犯人を捜し続けた。 [状況]と[対象]
 (c) 大雨の中を黙々とグラウンドを疾走した。 [状況]と[経路]
 (d) 大雨の中を憤然と部屋を出て行った。 [状況]と[起点]

(11)(a)～(d)が示すように、それぞれ[経路]と[対象]、[状況]と[対象]、[状況]と[経路]、[状況]と[起点]が両方とも対格で標示されており、これらの組み合わせであれば、意味役割の異なる2つの対格成分が同じ節の中に共起することも不可能ではない。それにもかかわらず、排他的に[経路]と[起点]の共起が許されないということは、対格による[起点]と[経路]が相補的に実現するという本稿の仮定を支持するものと思われる。^[7]

これらの考察から、第1節の(4)に[起点]を追加すると、対格における[対象][経路][起点]の関係は、次のように図示できる。



この図で、[経路]と[起点]の間の矢印⇔は、対格による[経路]と[起点]が相補的に実現されることを示すものと理解されたい。

ところで、[起点]の対格標示に[経路]のゼロ実現が前提になるという本稿の分析は、先行研究の記述から訂正すべき部分を指摘することにも貢献する。具体的には、寺村(1982:107)、森田(1989:1253)、益岡・田窪(1992:75)などで述べられているように、例えば「落ちる」のような非意志的な行為では[起点]を「ヲ格」で標示できないと言われる点である。

- (13)(a) 太郎が馬から落ちた。
 (b) * 太郎が馬を落ちた。

しかしながら、(b)が非文法的になる理由を単純に主格NPの非意図性に帰着させるのは適切で

はない。というのも、次の(14)のペアが示すように、動詞「落ちる」に関しては主格の「太郎」に明確な意図があっても[起点]を対格で標示することはできないからである。

- (14)(a) 太郎は落ちようと思って馬から落ちたのだった。
 (b) * 太郎は落ちようと思って馬を落ちたのだった。

つまり、動詞「落ちる」では主格の意図性にかかわらず決して[起点]を対格で標示できないのであるから、(b)の非文法性は動詞「落ちる」そのものに起因すると考えるべきである。本稿の分析に従って[起点]を対格で標示できない理由を説明すれば、次の(15)の例が示すように、そもそも動詞「落ちる」が[経路]を実現できる動詞であることに帰着される。

- (15)(a) こんな急斜面を本当に落ちるんですか？
 (b) 小さな石がビルの真横を落ちて行った。

(a)は流水プール施設に設けられた「ウォータースライダー」と呼ばれる大掛かりな滑り台をTVレポーターが自ら滑走する直前の発話を採ったものであるが、対格の「急斜面」が[経路]であることは明らかであり、同様に、(b)のような非意図的な行為でも「落ちる」は[経路]を実現し得ることが分かる。かくして「落ちる」が[起点]を対格で標示できないのは、そもそも「落ちる」が[経路]を実現する動詞だからであって、主格NPの意図性に制約されるものではないのである。^[8]

以上、本節では、対格による[起点]標示について、語彙的に[経路]が実現しない動詞句内に限って[起点]の解釈が可能であり、[経路]と[起点]が相補的に分布することを示した。

3. 対格による[起点]標示の意味的特質

この第3節では、[起点]の対格標示を機能的に《起点の焦点化》と分析するとともに、2つの制約のうちの1つを取り上げ、その理由を意味的な観点から説明する。

はじめに、[起点]の対格標示を奪格標示との交替現象として見たとき、奪格と対格の差異は意味的にどのように特徴づけられるだろうか。この点について、影山(1980:44-46)では“対格に比して奪格は[起点]を焦点化する”と述べており、その傍証として、次の(16)のようなペアにおいて、[起点]のNPが焦点的なwh-疑問詞句のとき(a)のような奪格標示の方が(b)のような対格標示より適切になることを挙げている。

- (16)(a) ひかり号は何番線から発車しますか？
 (b) ? ひかり号は何番線を発車しますか？

化することができる。

もう1つ、当該の現象を解析する理論的前提として援用したいのは、池上(1981:121-170)や Ikegami(1987)で詳説されている《[起点]と[着点]の非対称性》であり、具体的には次のような関係である。

(20) 起点と着点の非対称性： [着点] > [起点]

この非対称性が表すのは、通言語的に[起点]と[着点]の間にも本来的な非対称性が認められ、一般に[着点]の方が無標の性格をもつというものである。

では、上述した《格の階層性》と《[起点]と[着点]の非対称性》を前提として、具体的な言語現象について意味的に考察してみよう。[起点]における奪格と対格の格交替に関しては既に2つの制約が知られているが、その2つの制約のうち他の1つは次節で扱うこととし、本節で取り扱う制約現象は次の通りである。すなわち、[起点]を対格で標示できるのは、次の(21)のように「ニ格」によって[着点]が明示的に実現されないときに限られるというものである。

(21)(a) 花子が部屋から出た。

(b) 花子が部屋を出た。

(22)(a) 花子が部屋から廊下に出た。

(b) * 花子が部屋を廊下に出た。

逆に、(22)のように、同一の節の中に[着点]の「廊下」が「ニ格」によって明示的に実現される時、[起点]は義務的に奪格でなければならず、対格で標示することは許されない。

このとき、格標示と《[着点]>[起点]》との対応関係を明示的に表示すると、以下のような。まず、(23)(a)のように、[着点]と[起点]とをそれぞれ与格と奪格で標示したとき、序列上の《与格>奪格》の関係は非対称的な《[着点]>[起点]》の関係に反映され、本来的な非対称関係が正常に保持される。

(23)(a) 部屋から廊下に出る。

|| ||

起点 < 着点

(b) * 部屋を 廊下に出る。

|| ||

* 起点 > 着点

これに対して、(b)のように[起点]を対格で標示すると、序列上の《対格>与格》の階層から、顕著性において[起点]が[着点]を越え、結果として本来的な《[着点]>[起点]》の関係を壊すことになる。この関係の崩壊こそが、明示的に[着点]が「ニ格」で実現されるとき[起点]を対格で標示できない理由である。

それでは、上述の分析を支持する傍証を1つだけ挙げておこう。次のペアが示すように、格標示の方法を変えて[着点]の顕著性を[起点]より高くすることで、再び容認度が回復するというものである。

- (24)(a) * 三蔵がインドに中国を発つ。
 (b) 三蔵がインドに向かって中国を発つ。

(b)における太字部の「インドに向かって」は Matsumoto(1997:290)が述べているように、独立した動詞句(VP)というより後置詞句に「文文化(grammaticalization)」したものと分析される。このような後置詞句は構成要素に動詞をもつ点で形態統語的に通常の格助詞よりも重い存在と考えてよいので、(b)の容認度が回復するのも、後置詞句化によって再び[着点]が[起点]より顕著性において高くなり、[着点]と[起点]の関係が正常化するためと説明できる。また、[着点]がゼロ実現のとき[起点]を対格で標示しても非文にならないのは、上で述べた[着点]と[起点]の逆転が顕在化しないためと説明されることになる。^[10]

以上、本節では、[起点]の対格標示が統合関係において[起点]を焦点化すると分析を提示し、その証左を挙げた。

4. 対格による[起点]の過程的特質

この第4節では、[起点]の対格標示に課せられる2つ目の制約を取り上げ、《過程》性の観点から「カラ格」との交替現象について考察する。

さて、対格による[起点]の格標示には、前節で挙げた制約のほかにもう1つ制約が知られている。すなわち、[起点]の格標示が「ヲ格」と「カラ格」で交替可能なのは移動主体の主格NPが[+意志]のときに限られるというものであり、次のように例示される。

- (25)(a) 太郎が川岸 から / を 離れる。
 (b) 丸太が川岸 から / ? を 離れる。

つまり、(a)のように主格NPが[+意志]のときには[起点]を奪格で標示することも対格で標示することも可能であるのに対し、(b)のように主格NPが[-意志]のとき[起点]は奪格標示だけが可能であって、対格標示は許されない。^[11]

これに関連して考慮しなければならないのは、次のように、主格NPが[+意志]であっても、[起点]が[+人間]のとき、その[起点]は対格で標示できないという事実である。

(26)(a) 次郎が花子から離れた。

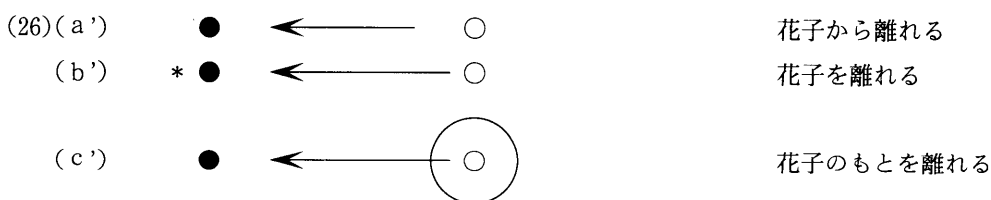
(b) * 次郎が花子を離れた。

ここでは主格NPが[+意志]であるから、[起点]の「花子」を対格で標示し得ないのは[起点]の方に何らかの制約が課せられるためと考えなければならない。実際、杉本(1986:315)でも述べられていることであるが、次の(26)(c)や(d)のように起点NPに「のもと」や「のそば」を付加すると、再び対格での標示が可能になる。

(26)(c) 次郎が花子のもとを離れた。

(d) 次郎が花子のそばを離れた。

このように、起点NPが[+人間]のとき「のもと」や「のそば」を付加することで容認度が回復する現象に対しては、「のもと」や「のそば」を付加することによって[起点]の周囲に一定の広がり保証され、離脱する《過程》のプロファイルが容易になったためと考えることで一貫した説明を与えることが可能になる。このことは視覚的に次のように表せる。



つまり、上述の(26)(a)のように[起点]を奪格で標示するときはTRの●がLMの○と離れていることに重きが置かれるので、[起点]NPが人であっても何ら問題はない。これに対して、(b)が非文になるのはLMが人間のとき、人間が他の人間から離れる《過程》をプロファイルする解釈が困難であるためと説明され、(c)が容認されるのは一定の広がり付加することで離脱の《過程》をプロファイルすることが容易になったためと理解される。^[12]

この分析が正しければ、主格NPが[-意志]のとき[起点]を対格で標示できない理由も、対格の《過程》性という観点から再考されるべきであり、結論的には、[-意志]の主格NPが内在的に可動力をもたないために外的な力だけで自然に離れる《過程》をプロファイルすることが困難であるためという可能性が強くなる。実際、次の例が示すように、主格NPが[-意志]であっても文脈から主格NPを動かす外的な力が明示的に与えられれば、離脱の《過程》をプロファイルするこ

とが容易になり、[起点]を対格で標示したときの容認度が高くなる。

- (27)(a) 増水で川の流が急に速くなり、丸太が川岸を離れ始めた。
 (b) 台風6号は日本列島を離れ、海上で熱帯低気圧に変わりました。

また、(b)で離脱の《過程》をプロファイルすることが可能なのは「台風6号」が[-意志]であっても自律的な可動力を十分もっていることを百科辞書の知識として話者が知っているためと理解される。したがって、[起点]を対格で標示できるかどうかは、主格NPの意志性が本質的な問題なのではなく、離脱の《過程》をプロファイルできるか否かに帰着されるのである。主格NPの意志性が高いとき《過程》をプロファイルしやすくなるのは、文脈の支持がなくても主格NPが自律的に可動するものだからにほかならない。^[13]

また、上述の分析に従えば、次のようなケースについても同様の原理で説明される。

- (28)(a) * 太郎も、ようやく大学から卒業することができた。
 (b) 太郎も、ようやく大学を卒業することができた。

この例で[起点]の「大学」が対格でなければならないのは、通常「卒業する」ことを描写するのに学校から離脱する《過程》をプロファイルしない形で把握することが不適切だからということになる。このとき「卒業」という事象において不可避的に《過程》をプロファイルする必要があるというのは、在学中の活動が卒業にとって決定的に重要であり、その活動こそが卒業までの《過程》にほかならないからである。したがって、次の例が示すように「離脱した後の状態」の方に比重を移すことができれば、奪格による[起点]標示も容認度が回復する。

- (29)(a) 次郎も、ようやく暴走族から卒業することができた。
 (b) 次郎も、ようやく暴走族を卒業することができた。

この例で(a)のような「カラ格」標示が容認可能になるのは、通常教育機関を卒業する場合と異なり「暴走族」に所属していたときの《過程》の活動を問題にしなくても「卒業する」ことが成り立つからであって、むしろ「暴走族」と離れていることの方に重きを置くことが社会的にも望ましい状態と期待されるためと言ってよい。

さらに、本稿の仮説は比喩的表現の分析にも有効である。塚本(1991:114)が言うように、比喩的な意味は奪格で標示したときに比して対格で標示したときの方が強い。

- (30)(a) 横綱が土俵を降りた。

(b) 横綱が土俵から降りた。

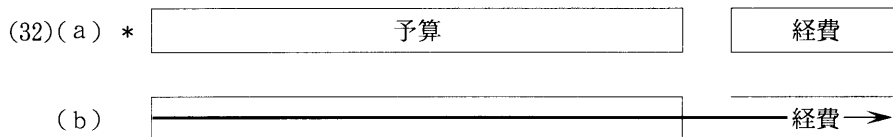
(a)と(b)の両方が「横綱」の空間的な移動行為を表すのに対し、比喩的な「引退する」の読みは、(a)の方が(b)より強い。この差も、対格標示が《過程》をプロフィールするという本稿の仮説から説明される。上のケースと同様に、土俵での活動が「横綱」の「引退」にとって決定的に重要であり、その行為こそが「引退」までの《過程》にほかならないからである。^[14]

最後に、本稿の分析は、次のような、やや特殊な語法についても一貫した方法で扱うことが可能である。

(31)(a) * 経費が予算から出るかもしれない。

(b) 経費が予算を出るかもしれない。

これらの例では、主格NPが[-意志]であるから、もし本当に「非対格仮説」が正しいのなら[起点]の「予算」が対格になることは絶対にはずであるのに、実際は義務的に対格でなければならず、奪格は許されない。このような現象も意味的な観点から分析することによって初めて適切に説明されるのであって、上のケースとの差異に着目すれば、人や物の存在地が点的であり得るのに対して、数量が本来的に带状である点に帰着できる。これを視覚的に説明すると、(31)(a)のように[起点]を奪格で標示できないのは、次の図(32)(a)のように「経費」が「予算」と点的に乖離することがあり得ないためということになる。



逆に、(b)のように「予算」の格標示が対格でなければならないのは、主格の「経費」が本来的に不断の線条をなすものであって「予算」を超える《過程》を背景化することができないためと説明される。

では、同じく動詞「出る」に関して、上とは逆に、[起点]が対格でのみ標示可能で、奪格で標示できないケースは一体どのように処理できるであろうか。

(33)(a) ザルツブルグから音楽の天才が出た。

(b) * ザルツブルグを音楽の天才が出た。

この例で[起点]の「ザルツブルグ」を対格で標示できないのは「出る」という事象の《過程》をプ

ロファイルできないためであり、(33)の「出る」が意味的に〈離脱〉より〈出現〉の側面を前景化したものであって離脱の《過程》を描写したものではないためと説明される。

以上、本節では[起点]の対格標示が離脱の《過程》をプロフィールするとの分析に基づき「カラ格」との弁別的な差異について統一的に説明できることを例証した。

5. 結語

本稿は、現代日本語における空間次元の「ヲ格」を考察対象とし、空間の対格に関する文法現象を意味的に説明するための議論を行った。本文で検討した「ヲ格」の特性は次のように要約される：

- [i] 日本語の「ヲ格」は《起点→過程→着点》における《過程》のプロファイルとしてスキーマ的に規定され、[経路]は《過程》が空間次元において実現したものと特徴づけられる。
- [ii] 空間次元において対格による[経路]と[起点]は相補的に分布し、[起点]の対格標示は[起点]を焦点化するために[経路]の対格が援用されたものとして分析される。
- [iii] [起点]の対格標示は、[起点]を焦点化すると同時に離脱の《過程》をプロフィールする点で、[起点]の奪格標示と意味的に差別化される。

ここで強調したいのは、非対格仮説を援用した統語的分析が[起点]と[経路]を画然と区分しなければならなくなるのに対し、本稿のような意味に基づく分析が[起点]と[経路]を包括的に扱える点である。以上の議論により、対格の多義性が統一的に記述されるとともに、他の形式との弁別的な差異をも一貫した原理で意味的に説明し得ることが示されたと思われる。

注

- [1] 格助詞「を」の意味分類について、城田(1993:70-72)は[対象]とそれ以外に二分しており、杉本(1986:281)は[対象][経路][状況]の3つに大別した。また、国立国語研究所(1997:107-118)では延べ16の意味を列挙している。
- [2] 本稿では[経路]と[起点]に絞って考察する。割愛する[対象][時間][状況]との関連については、菅井(1998)を参照されたい。
- [3] [経路]の対格は、久野(1973:58-60)や児玉(1991:94-95)らの見解に反し、必ずしも《全体性》を保証しない。実際「日曜日に渋谷を歩いた」といっても、常識的に「渋谷」の全領域を歩けるわけではない。この点については杉本(1995:120-123)も参照されたい。
- [4] 厳密に言えば、[経路]の「ヲ格」と共起する「ニ格」は[着点]というより[方向]と言うべきであるが、本稿では[着点]と[方向]を区別しないで扱うことにする。
- [5] スキーマに関して、対格を主体の対極に位置づけるという特徴づけは、[対象]以外の意味へ拡張するとき決定的に重要となる。というのも、もし《過程》が主格または対格で実現されるというだけなら空

間的な過程である[経路]が主格で標示される可能性も残るはずであるのに、主格が[経路]を標示することがなく常に対格で標示されるのは、[経路]が[主体]そのものとは別の実体として[主体]の対極に位置づけられることを示している。

- [6] この“空間領域の対格には主格の移動性が伴う”という条件は、対格が主格(主体)の所在位置を指定するときに限られる。したがって、例えば「空を見る」のように、[対象]としての対格に移動性という条件が課せられないことは言うまでもない。
- [7] このほかにも“[経路]と[時間]”など共起できない組み合わせが幾つかあるが、それは、そのような組み合わせを許容する適当な動詞がないことに帰着されるべきであり、この点で、[起点]と[経路]の組み合わせが特異であることと事情が異なる。なお「ヲ格」の共起関係については、杉本(1986:269-300,1993:30)も参照されたい。
- [8] 三宅(1995:70,1996:145)は、例えば「帰る」や「来る」のように“着点を同時に含意する動詞では[起点]を対格で標示できない”と述べているが、本稿の理論によれば、語彙的に「帰る」や「来る」が対格で[経路]を実現できる動詞であるためと説明される。
- [9] 類例として「今度の選挙は自民党 から / * を 出る」などが挙げられる。このとき、[起点]の「自民党」は範列関係において他の政党と対比されているからである。
- [10] (24)(b)で、太字部の「インドに向かって」が後置詞句に文法化されていることの論拠として、統語的に「インドに向かって」と「中国を発つ」の間に「それから」を挿入できないことと、音韻的に同じ位置にポーズが入り得ないことが挙げられる。実際、意味的にも「インドに向かって」と「中国を発つ」が異なる側面を具現化したものではなく、実質的に「インドに向かう」が「中国を発つ」ことの一側面でしかないことは明らかであろう。
- [11] 動詞「離れる」は対格が[経路]を実現することはないので、第2節で言及した「落ちる」の場合と同じように扱うことはできない。
- [12] なお、[起点]を「カラ格」で標示したとき主格成分と“離れた状態”を示すことは、述語を状態的な「離れている」にしたとき「危険ですから現場 から / ? を 離れていて下さい」のように奪格標示だけが自然に容認されることから確認できる。
- [13] ちなみに、[起点]の対格について、山田(1981:96-98)、川端(1986:25-26)および田中・松本(1997:30)は[対象]として分析しており、益岡(1987:115-116)は[対象]と[起点]の両方をもつと述べているが、いずれの先行研究も奪格との交替現象を説明するのに有効ではない。また、城田(1981:44-45)のように「ヲ格」に《指向性》という素性のみを認める分析も、交替現象の説明に何ら役立たない。
- [14] 影山(1980:46-47)は、奪格標示が純然たる物理的移動を表すのに対し対格標示は抽象的(本来的)移動を含意すると述べているが、対格標示のみが抽象的(本来的)移動を含意し得るのも、対格標示が《過程》をプロフィールするという本文での分析に帰着できる。

参 考 文 献

- 池上嘉彦 1981 『<する>と<なる>の言語学』大修館書店。
 ————— 1993 「<移動>のスキーマと<行為>のスキーマ——日本語の『ヲ格+移動動詞』構造の類型論的考察——」『外国語科研究紀要』(東京大学教養学部外国語科)第41巻・第3号, pp. 34-53.
- 影山太郎 1980 『日英比較・語彙の構造』松柏社。
- 川端善明 1986 「格と格助詞とその組織」宮地裕(編)『論集日本語研究(一)』明治書院, pp. 1-40.
- 久野 暉 1973 『日本文法研究』大修館書店。
- 国立国語研究所 1997 『日本語における表層格と深層格の対応関係(国立国語研究所報告113)』三省堂。

- 児玉徳美 1991 『言語のしくみ——意味と形の統合』大修館書店。
 柴谷方良 1978 『日本語の分析』大修館書店。
 城田 俊 1981 「格助詞の意味」『国語国文』第50巻・第4号, pp. 43-56.
 ————— 1993 「文法格と副詞格」仁田義雄(編)『日本語の格をめぐる』くろしお出版, pp. 67-94.
 杉本 武 1986 「格助詞」奥津敬一郎・田沼善子・杉本 武(共著)『いわゆる日本語助詞の研究』凡人社, pp. 227-380.
 ————— 1993 「状況の『を』について」『九州工業大学情報工学部紀要 人文・社会科学篇』第6号, pp. 25-37.
 ————— 1995 「移動格の『を』について」『日本語研究・第15号』東京都立大学国語学研究室, pp. 120-129.
 菅井三実 1993 「構文スキーマ理論序説」『人文科学研究・第22号』名古屋大学大学院文学研究科, 人文科学研究編集委員会, pp. 33-50.
 ————— 1998 「対格のスキーマ的分析とネットワーク化」『名古屋大学文学部研究論集』130(文学44), pp. 15-29.
 田中茂範・松本 曜 1997 『日英語比較選書⑥——空間と移動の表現』研究社出版。
 塚本秀樹 1991 「日本語における格の交替現象について」『愛媛大学法文学部論集(文学科編)』第24号, pp. 103-127.
 寺村秀夫 1982 『日本語のシンタックスと意味 I』くろしお出版。
 益岡隆志 1987 『命題の文法』くろしお出版。
 益岡隆志・田窪行則 1992 『基礎日本語文法——改訂版——』くろしお出版。
 三宅知宏 1995 「ヲとカラ——起点の格標示」宮島達夫・仁田義雄(編)『日本語類義表現の文法』くろしお出版, pp. 67-73.
 ————— 1996 「日本語の移動動詞の対格標示について」『言語研究』第110号, pp. 143-168.
 森田良行 1989 『基礎日本語辞典』角川書店。
 山田 進 1981 「機能語の意味の比較」国廣哲彌(編)『日英語比較講座[3]意味と語彙』大修館書店, pp. 53-99.
 山梨正明 1994 「日常言語の認知格モデル[1]——格解釈と認知プロセス」『言語』第23巻・第1号(1994年1月号), pp. 100-105.
 Claudi, U. and B. Heine 1986 “On the Metaphorical base of grammar,” *Studies in Language*, 10(2), pp. 297-335.
 Heine, B., U. Claudi, and F. Hünemeyer 1991 “From cognition to grammar : evidence from African languages,” In Traugott, E. C. and B. Heine (eds.), *Approaches to grammaticalization. Vol. 1. : Typological Studies in Language (TSL)*, Vol. 19a. Amsterdam and Philadelphia : John Benjamins Publishing Company, pp. 149-187.
 Ikegami, Y. 1987 “‘Source’ vs. ‘Goal’ : a Case of Linguistic Dissymmetry.” In Dirven, R. and G. Radden(eds.) *Concepts of Case*. Tübingen : Gunter Narr Verlag, pp. 122-146.
 Johnson, M. 1987 *The Body in the Mind*. Chicago and London : The University of Chicago Press.

- Matsumoto, Y. 1997 "From attribution /purpose to cause : image-schema and grammaticalization of some cause markers in Japanese," In Verspoor, M. H., K. D. Lee, and E. Sweetser(eds.) *Lexical and syntactical constructions and the construction of meaning*(CILT, 150). Amsterdam and Philadelphia : John Benjamins Publishing Company, pp. 288-301.
- Shibatani, M. 1985 "Passives And Related Construction: A Prototype Analysis," *Language*, Vol. 61, pp. 821-848.
- Wierzbicka, A. 1981 "Case marking and human nature," *Australian Journal of Linguistics*, Vol. 1, pp. 43-80.